

愛媛県中予方言における 多様な形容詞連用形の使い分け

言語学・応用言語学専門分野

2018（平成 30）年度入学

池 美礼

2022（令和 4）年 1 月提出

要旨

本研究の目的は、愛媛県中予方言（松山市・伊予市を含む中予地方の方言；詳しくは2章参照）における形容詞に焦点を当て、特に述語の修飾および述語の補語となる際に用いられる連用形（標準語のク形に対応）の形式と機能を記述することである。愛媛県中予方言の形容詞連用形に関しては、久保（2018）や方言文法全国地図（1993）が言及しており、多様な連用形の形式とその機能に関する部分的な記述を行ってはいるが、全体像を明らかにするような体系的な記述とは言えない。そこで本研究において、形容詞の語彙、連用形が生じる環境（後続要素）、実現する語形に着目しながら、より体系的な記述を示すことを目指す。

本論文は、愛媛県中予方言の形容詞連用形を体系的に記述した初めての研究である。

目次

1. はじめに	1
2. 対象言語について	2
2.1. 地理	2
2.2. 方言区画	3
3. 先行研究	4
3.1. 久保（2018）の形容詞連用形の記述	4
3.2. 方言文法全国地図（GAJ）	6
3.3. 先行研究の問題点	6
4. 中予方言の形容詞連用形の記述	6
4.1. 調査の概要	6
4.1.1. 話者	6
4.1.2. 形容詞語根	6
4.1.3. 後続要素	7
4.2. 調査結果	9
4.2.1. 連用諸形式	9
4.2.2. 連用諸形式と後続要素の関係	10
4.3. 記述的一般化	12
4.3.1. 後続要素がナイの場合	12
4.3.2. 後続要素がナルの場合	12
4.3.3. 後続要素がスルの場合	12
4.3.4. 後続要素がテ形接辞の場合	13
4.3.5. 後続要素が一般動詞の場合	13
4.4. 通時的な観点	13
4.4.1. 挿げ替え説	13
4.4.2. 挿げ替え説の問題点	14
4.4.3. 新モデルの提案	15
5. 形容詞連用諸形式に与格がつく場合	18
5.1. 与格接合連用諸形式と後続要素の関係	18
5.1.1. 与格が接合する連用諸形式について	19
5.1.2. 後続要素について	19
5.2. 与格接合名詞と与格接合連用書形式の並行性	20

5.2.1. 与格接合連用諸形式.....	20
5.2.2. 与格の方向性.....	21
6. 語根 1 モーラ形容詞について.....	22
6.1. コイ.....	23
6.2. ナイ.....	24
6.3. ヨイ.....	25
7. おわりに.....	26
参照文献.....	28
付録 1 (例文)	29
付録 2 (調査結果)	30

1. はじめに

本研究の目的は、愛媛県中予方言（松山市・伊予市を含む中予地方の方言；詳しくは2章参照）における形容詞に焦点を当て、特に述語の修飾および述語の補語となる際に用いられる連用形（標準語のク形に対応）の形式と機能を記述することである。以下の例に示すように、愛媛県中予方言（以下、中予方言）では、連用形に複数の形式が見られ、それらはその出現環境(1)a-e によって使い分けが見られる場合がある。

(1) 語根アカ-「赤い」の連用形

a. ナイの補語

別にそのりんご {アカ/アコ} ないやん。

「別にそのりんご赤くないじゃん。」

b. ナルの補語

段々りんごが {アカ/アコ} なる季節やね。

「段々りんごが赤くなる季節だね。」

c. テ形の語幹

りんごめっちゃ {アコー} て、美味しそうやね。

「りんごがすごく赤くて、美味しそうだね。」

d. スルの補語

顔 {アコー} するのやめてや。

「顔赤くするのやめて。」

e. 一般動詞の副詞修飾（様態）

紅葉 {アカー/アコー} 染まってきたね。

「紅葉が赤く染まってきたね。」

上の例では、形容詞語根アカ-「赤い」に、ナイ・ナル・テ・スル・一般動詞（様態・結果）が後続する場合、(1)のように、「アカ」、「アカー」、「アコ」、「アコー」という形式が現れる。テ形の場合を除き、これらの形式は語形であるが、テ形の場合は、語幹の形になる。このように連用形に形式が複数あることを踏まえ、これら諸形式を連用諸形式と呼ぶ。本研究では、先行研究の記述を踏まえつつ、連用諸形式の形式面の整理と出現環境による使い分けを記述することを目指す。

2. 対象言語について

2.1 地理

中予方言が話される地域は、愛媛県中予地方である（図 1）。愛媛県は 3 つの地域に分割され、東から東予、中予、南予と呼ばれている。方言区画も概ねそれに対応しており、6 つの方言区画に分類される。東から、東予方言、瀬戸内海島嶼方言、中予方言、大洲方言、宇和方言、渭南方言である。

中予地方は、四国最大の人口を持つ松山市、伊予市、東温市、久万高原町、砥部町、松前町によって構成されている。松山市の人口は 508,783 人、伊予市の人口は 34,718 人、東温市の人口は 33,732 人、久万高原町の人口は 7,105 人、砥部町の人口は 8,495 人、松前町の人口は 11,973 人である（2021 年 12 月 1 日現在）¹。中予地方は愛媛県の人口の 4 割強を擁し、その中核都市である松山市では人口集中が進む一方、久万高原町をはじめとする山間部、島嶼部では過疎化、高齢化が進行している²。

¹ 「愛媛県推計人口及び人口動態」

<https://www.pref.ehime.jp/toukeibox/datapage/suikijinkou/saishin/suikijinkou-p01.html> 参照
（2022 年 1 月 7 日最終閲覧）

² 「愛媛県庁公式ホームページ」

https://www.pref.ehime.jp/h12100/chokikeikaku/documents/ap13_5s-02.pdf 参照（2022 年 1 月 7 日最終閲覧）



図 1. 愛媛県の方言区画

(杉山 (1964) を基に, 宮岡大氏が白地図 KenMap Ver.9.2 により作成したものを, 筆者一部変更)

2.2. 方言区画

久保 (2018) において, 中予方言に属する松山市方言についての特徴を示している。松山市方言は, 音韻に関しては, 京阪方言の最も近い直系, 伝統的には京阪式アクセントを持つ。文法的な特徴として, コピュラについて伝統的に「ジャ」を使用するが, 近年では「ヤ」の使用も増加している。また, 理由の接続詞は「ケン」, 継続のアスペクトは「ヨル/トル」を使用する (久保 2018: 87)。

江端 (1987) は, ウ音便に関して西部日本を中心とした現象であり, 中部地方に非音便との境界があると示している。久保 (2018) は, 愛媛県中予方言にも, 形容詞連用形のウ音便化が認められることを指摘している。

また, 『愛媛県言語地図集』(愛媛大学方言ゼミナール 1981) を見ると, 中予方言の特徴的な文法事象が確認できる。例えば命令文「行きなさい」は「オイキ」が分布する。また, 依頼文「～して下さい」は「シテクレンカ」が分布する。アクセントの分布は多様性があり, 東予から中予にかけて京阪式が広がるが, 香川県県境付近地域は讃岐式となる。中予との境界に位置する大洲市や内子町は無アクセント地域になる (久保 2018)。

3. 先行研究

3.1. 久保（2018）の形容詞連用形の記述

愛媛県松山市方言の形容詞連用形について共時的に記述している先行研究に久保（2018）がある。久保（2018）は、愛媛県松山市方言において、形容詞に中止形・否定形・ナル形が後続する場合、「アカ」、「アカー」、「アコ」、「アコー」の語形が存在すると指摘している。

また、特に語幹末母音が a の場合については、「アカイ」「カタイ」「タカイ」など、形容詞の語幹末音素が ka, ta のものは交替が起こりやすいが、「カライ」「アマイ」「コワイ」など、形容詞の語幹末音素が ra, ma, wa のものは交替が起こりにくいとしている。

表 1. 後続要素と形容詞の活用形（久保 2018: 89 を参照）

後続要素	活用
中止形	アコーテ
否定形	アコ（一）ナイ
ナル形	アコ（一）ナル アカナル

また、形容詞が形容詞連用形化する際に、その活用の型は一つであるとし、中止形・否定形・ナル形が後続する場合において、以下のような交替法則を提示している。

表 2. 語幹末母音の交替法則（久保 2018: 93 を参照）

語幹末母音	交替後	語例	活用
a	o, a	アカイ（赤い）	アコ（一）ナル アカ（一）ナル
i	ju, i	ウレシー （嬉しい）	ウレシューナル ウレシ（一）ナル
e	o	エー（良い）	ヨーナル
u	u	ワルイ（悪い）	ワル（一）ナル
o	o	オモイ（重い）	オモ（一）ナル

(2) 中止形

中止形では語幹または交替語幹の長音形に「テ」を後続させる。交替語幹がある形容詞では「アカーテ」のように交替が起こらず、そのまま元の語幹が使用される場合もある。

コノ カミワ {アコーテ/アカーテ} アノ カミワ シロイ。

「この紙は赤くて、あの紙は白い。」

述語の修飾および述語の補語となる際に用いられる連用形（標準語のク形に対応）

[久保 2018: 93]

(3) 否定形

「アコ（一）ナイ」などのように、語幹または交替語幹、あるいはその長音形に「ナイ」が後続する。中止形と同様、「アカ（一）ナイ」のように交替が起こらない場合もある。

マダ ミガ {アカ（一）ナイ/アコ（一）ナイ}。

「まだ身が赤くない。」

[久保 2018: 93]

(4) ナル形

語幹または交替語幹、あるいはその長音形に「ナル」を後続するが、中止形、否定形と同様「アカ（一）ナル」のように交替が起こらない場合もある。

a. ネットガ デテ カオガ {アコ（一）ナル/アカ（一）ナル}。

「熱が出て顔が赤くなる。」

[久保 2018: 94]

b. オコヅカイオ モローテ {ウレシユーナル/ウレシ（一）ナル}。

「お小遣いを貰って嬉しくなる。」

[久保 2018: 94]

c. シツガ ヨーナル。

「質が良くなる。」

[久保 2018: 94]

3.2. 方言文法全国地図 (GAJ)

『方言文法全国地図』(1993) (以下, GAJ) において, 「高い」にナイが後続するデータのある第3集第137図を見ると, 愛媛県中予地方の辺りには/takoonai/と/takoonae/が分布していることがわかる。

「高い」にテが後続するデータのある GAJ 第3集138図を見ると, 愛媛県中予地方の辺りには/takoote/が分布していることがわかる。

「高い」にナルが後続するデータのある GAJ 第3集139図を見ると, 愛媛県中予地方の辺りには/takoonaru/が分布していることがわかる。

3.3. 先行研究の問題点

久保 (2018) は, 語根が2モーラ以上, 語幹末母音が a の形容詞については, 「アカイ」, 「カタイ」, 「タカイ」, 「カライ」, 「アマイ」, 「コワイ」, 後続要素については「否定形」, 「中止形」, 「ナル形」という限られた語彙を説明するに留まっている。さらに, 「形容詞の活用の型は一つである」(久保 2018: 93) としているが, 後続要素による語幹単独形, 語幹長音形, 融合短音形, 融合長音形の現れ方の違いについては具体的に説明していないという点も問題である。GAJ も, 久保 (2018) と同様の問題を抱えている。形容詞は「高い」についてのみ, 後続要素は「否定形」, 「中止形」, 「ナル形」の調査に関してしかされておらず, 他の形容詞, 後続要素について, 説明がなされていない。すなわち, いずれの先行研究も, 網羅的な記述をおこなっていないという問題点がある。

4. 中予方言の形容詞連用形の記述

4.1. 調査の概要

4.1.1. 話者の情報

愛媛県中予方言の方言区画である松山市出身の男性話者1名 (65歳), 女性話者1名 (60歳), 同じく愛媛県中予方言の区画である久万高原町出身の男性話者1名 (54歳), 女性話者1名 (57歳) の計4名に対して調査を行った。また, 調査結果を考察する上で筆者 (久万高原町出身, 22歳女性) の内省を適宜参考にしている。

4.1.2. 形容詞語根

今回の調査で対象とする形容詞語根は2モーラ, 語幹末母音が a で, 語幹末子音が異なる形容詞語根を選定する (表3)。1モーラ語根は振る舞いが特殊であるため d, ひとまず2モーラの考察を行った上で, 6章において別途考察を行う。

表 3. 調査語彙

語幹末音素	形容詞
ka	アカイ
ta	カタイ
ra	アライ
ma	アマイ
wa	アワイ
sa	クサイ
ga	ナガイ

それぞれの語根は、以下に示す後続要素に応じて語形が異なる場合がある。

4.1.3. 後続要素

形容詞に後続するのは、久保（2018）で調査された語彙である否定語の「ナイ」、ナル形の「ナル」、中止形の「テ」に加えて、「スル」、「一般動詞（様態）」、「一般動詞（結果）」である。

表 4. 後続要素

後続要素
ナイ（否定語）
ナル（軽動詞）
スル（軽動詞）
テ（中止形）
一般動詞（様態）
一般動詞（結果）

後続要素は以下のように分類される。（図 2）

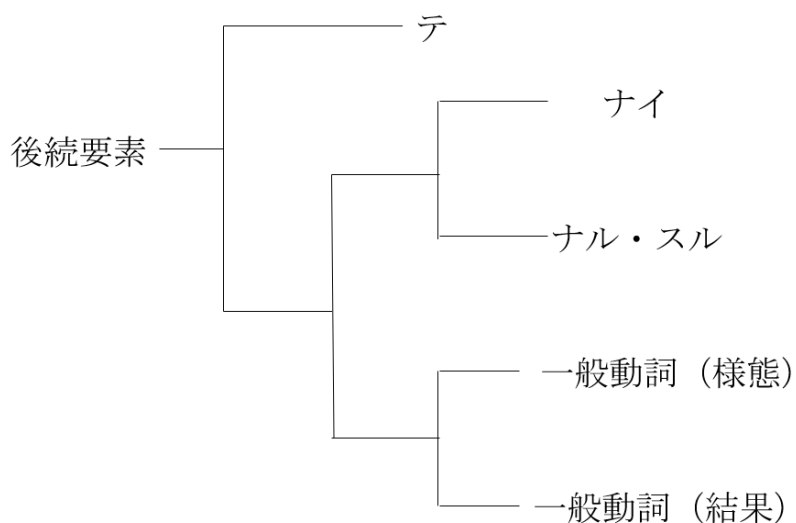


図 2. 後続要素のレベル

後続要素はクを形成するもの（テ形以外）と動詞そのものを形成するもの（テ形）の大きく二つに分かれる。クを形成するものの中でも、さらに、補語になるもの（ナイ・ナル・スル）と、副詞になるもの（一般動詞（様態・結果））に分かれる。また、補語になるものの中でも、否定語（ナイ）と軽動詞（ナル・スル）に分かれる。

中止形「テ」は、動詞そのものを形成するという点で、他の後続要素とレベルが異なっているため、以降では考察から外すこととする。

4.1.3.1. ナイ（否定語）

ナイは形容詞であり、形容詞の肯定形に対する否定形を形成する要素（否定述語の一部）である。

- (5) 別にそのりんごアカクナイやん。
「別にそのりんご赤くないじゃん。」

4.1.3.2. ナル（軽動詞）

ナルは軽動詞であり、述語の補語となる。

- (6) 段々りんごがアカクナル季節やね。
「段々りんごが赤くなる季節だね。」

4.1.3.3. スル（軽動詞）

スルは軽動詞であり，述語の補語となる。

- (7) 顔アカクスルのやめてや。
「顔赤くするのやめて。」

4.1.3.4. テ（中止形）

テは中止形である。

- (8) りんごめっちゃアカクテ，美味しそうやね。
「りんごすごく赤くて，美味しそうだね。」

4.1.3.5. 一般動詞（様態）

一般動詞が後続するとき，形容詞は副詞修飾となる。その中でも様態の一般動詞は動詞がどのように起こったかを表す。

- (9) 1人だけナガク話さんでや。
「1人だけナガク話さないで。」

4.1.3.6. 一般動詞（結果）

結果の一般動詞は，様態の一般動詞以外の事実や事象を表す。

- (10) 紅葉アカク染まってきたね。
「紅葉赤く染まってきたね。」

4.2. 調査結果

4.2.1. 連用諸形式

調査の結果，以下の連用諸形式を確認できた。

- (11) 中予方言の形容詞連用諸形式（久保 2018: 93 の交替規則を参照）
- a. 語幹単独形...形容詞の語幹のみで形容詞連用形となるもの
例：「アカイ」であれば，「アカ」
 - b. 語幹長音形...形容詞の語幹の長音化した形で形容詞連用形となるもの
例：「アカイ」であれば，「アカー」

- c. 融合短音形...形容詞の語幹末が **a** であるとき, **o** に交替して形容詞連用形となるもの
例:「アカイ」であれば「アコ」
- d. 融合長音形...形容詞連用形の語幹末が **a** であるとき, **o** に交替した形が長音化して形容詞連用形となるもの
例:「アカイ」であれば,「アコー」

久保 (2018) は, 語幹末母音が **a** の場合については,「アカイ」,「カタイ」,「タカイ」などは母音交替が起りやすいが,「カライ」,「アマイ」,「コワイ」など語幹末音素が **ra**, **ma**, **wa** のものは母音交替しにくいと指摘している。(12)に示すように, 本研究の調査では, 確かに **wa** に交替が起らなかったが, **ra**, **ma** の場合には母音交替が起ることが確認できた。以下では, 語幹末音素が **wa** である「アワイ」について, 融合短音形, 融合長音形が容認されないため, 考察対象から除外することとする。

(12) 60 代男性

- a. アマイ (**ma**)
なんか, あんた味付けがどんどん {アマ/アマー/*アモ/アモー} ナルね。
「なんか, あなた味付けがどんどん甘くなるね。」
- b. アライ (**ra**)
あんた手つき段々 {アラ/アラー/アロ/アロー} ナルね。
「あなた手つきが段々粗くなるね。」
- c. アワイ (**wa**)
夕焼けどんどん {アワ/アワー/*アウォ/*アウォー} ナルね。
「夕焼けがどんどん淡くなるね。」

4. 2. 2. 連用諸形式と後続要素の関係

表 5 は, 連用諸形式のそれぞれがどの後続要素と共起するかに関する調査結果をまとめたものである。縦軸には形容詞, 横軸には語形を変数として設定している。後続要素については, それぞれ, **Ni**, **Nr**, **Sr**, **Vs**, **Vr** と表すこととする。

- (13)
- a. **Ni**...ナイ
 - b. **Nr**...ナル
 - c. **Sr**...スル

- d. Vs...一般動詞（様態）
e. Vr...一般動詞（結果）

また、それぞれの容認度について、以下のように提示することとする。以下では後続要素が Ni（ナイ）の場合を例にしている。

- (14) a. Ni...容認できる（個人差なし）
b. (Ni)...個人差があり、容認できる場合とできない場合がある
c. *Ni...容認できない（個人差なし）
d. —...調査結果なし

表 5. 調査結果

形容詞\語形	語幹単独	語幹長音	融合短音	融合長音
アカイ	Ni, Nr, (Sr), —, *Vr	(Ni), (Nr), (Sr), —, (Vr)	(Ni), (Nr), (Sr), —, *Vr	*Ni, (Nr), (Sr), —, (Vr)
カタイ	(Ni), (Nr), (Sr), —, *Vr	(Ni), *Nr, (Sr), —, (Vr)	(Ni), (Nr), (Sr), —, (Vr)	(Ni), (Nr), (Sr), —, (Vr)
アライ	(Ni), (Nr), (Sr), —, (Vr)	(Ni), (Nr), (Sr), —, (Vr)	(Ni), (Nr), (Sr), —, (Vr)	*Ni, (Nr), (Sr), —, (Vr)
アマイ	Ni, (Nr), (Sr), —, (Vr)	(Ni), (Nr), (Sr), —, (Vr)	(Ni), (Nr), (Sr), —, (Vr)	*Ni, (Nr), (Sr), —, (Vr)
アワイ	(Ni), (Nr), (Sr), —, (Vr)	(Ni), (Nr), (Sr), —, (Vr)	*Ni, *Nr, *Sr, —, *Vr	*Ni, *Nr, *Sr, —, *Vr
クサイ	(Ni), (Nr), (Sr), *Vs, —	(Ni), (Nr), (Sr), (Vs), —	*Ni, (Nr), *Sr, *Vs, —	*Ni, (Nr), (Sr), (Vs), —
ナガイ	Ni, (Nr), (Sr), (Vs), —	(Ni), (Nr), (Sr), (Vs), —	(Ni), (Nr), (Sr), (Vs), —	(Ni), (Nr), (Sr), (Vs), —

4.3. 記述的一般化

4.3.1. 後続要素がナイの場合

以下の例で、「 $X > Y$ 」はXの方がYに比べて容認度が高いことを、「 $X = Y$ 」はほぼ同じ容認度であることを示す。(15)-(18)の結果から、形容詞にナイが後続する場合において、全ての話者に共通して語幹単独形（例：アカナイ「赤くない」）の容認度が一番高いということがわかった。さらに、全ての話者において、融合形式の2種を比べると融合短音形（例：アコ「赤く」）より融合長音形（例：アコー「赤く」）の方が容認度が高くなるということはない。すなわち、「融合長音 \geq 融合短音」が成り立つ。

(15) 60代女性

語幹単独形 > 融合長音形 > 語幹長音形 > 融合短音形

(16) 60代男性

語幹単独形 > 語幹長音形 > 融合長音形 > 融合短音形

(17) 50代女性

語幹単独形 > 融合長音形 > 融合短音形 > 語幹長音形

(18) 50代男性

語幹単独形 > 融合長音形 = 融合短音形 = 語幹長音形

4.3.2. 後続要素がナルの場合

形容詞にナルが後続する場合においても、全ての話者に共通して単独形の容認度が一番高いということがわかった。しかし、融合長音形と短音形の容認度については、短音形の方が長音形よりも容認度が高い話者もいるため、後続要素がナイの場合と違って、「長音 \geq 短音」は必ずしも言えない。

(19) 60代女性, 60代男性

語幹単独形 > 融合長音形 > 語幹長音形 > 融合短音形

(20) 50代女性

語幹単独形 > 融合短音形 > 融合長音形 > 語幹長音形

(21) 50代男性

語幹単独形 > 語幹長音形 = 融合短音形 = 融合長音形

4.3.3. 後続要素がスルの場合

スルに関しては、50代男性を除いて融合短音形の容認度が一番低いということが明らかになった。言い換えれば、後続要素がナイの場合と同様、ここでも「融合長音 \geq 融合短音」が成り立つ。

(22) 60代女性

融合長音形 > 語幹単独形 > 語幹長音形 > 融合短音形

(23) 60代男性

語幹単独形 > 融合長音形 > 語幹長音形 > 融合短音形

(24) 50代女性

融合長音形 > 語幹長音形 > 語幹単独形 > 融合短音形

(25) 50代男性

語幹単独形 > 語幹長音形 = 融合長音形 = 融合短音形

4.3.4. 後続要素がテ形接辞の場合

テに関しては、語幹形と融合短音形が一切現れず、融合長音形と語幹長音形のみ現れた。融合短音形が容認されず、融合長音が容認されるという点から、後続要素がナイ・スルの場合と同様、「融合長音 \geq 融合短音」がここでも成り立つと言える。

(26) 全ての話者

融合長音形 > 語幹長音形

4.3.5. 後続要素が一般動詞の場合

一般動詞については個人差が大きく、4つの語形の現れやすさの階層は多種多様であった。

4.4. 通時的な観点

形容詞連用諸形式の共時的なバリエーションは、それらの通時的な変化プロセスの解明に役立つ可能性がある。本節では、中予方言と一部重なるバリエーションを持つ西日本方言の形容詞連用諸形式の通時変化に関する研究を取り上げ、その問題点を指摘するとともに、本研究の共時的データが示唆する別の変化シナリオを提案する。

4.4.1. 挿げ替え説

大西（1997）は、近畿地方を中心に西日本全般において、「高くない」「高くなる」を「タカナイ」「タカナル」（本研究でいう語幹単独形）のように言うことがあるとし、この現象をウ音便（「タコー」；本研究でいう融合長音形）を契機として発生したものであると指摘している。タカク>タコーのウ音便が起こると活用体系の中に本来なかった母音が入り込み、活用形のタコを語幹のタカで挿げ替えると考える「挿げ替え説」を提示している。

(27) 大西 (1997: 513) の「挿げ替え説」(形容詞「高い」を例に)

takaku	>	takau	>	takoo	>	tako	>	taka
Step 1		Step 2		Step 3		Step 4		Step 5

(27)における Step の番号付は本論文筆者によるものである。Step 3 は本研究の中予方言の共時的体系の記述における融合長音形, Step 4 は融合短音形, Step 5 は語幹単独形である。

この説によると, Step 1, 2 と語幹が taka で安定していたものが, Step 3 において新たな母音が入り込む。連母音の融合が起こり, Step 4 で活用体系の中に本来なかった tako のような形が別に現れ, 新たな母音を発生させると, 体系性を乱す。Step 5 でこれをもう一度体系的に整えるために活用形のタコを語幹のタカで挿げ替える。なお, 榎垣 (1962: 33), 榎垣 (1944) も同様の考えを示している。

4.4.2. 挿げ替え説の問題点

挿げ替え説の射程にあるのは西日本方言全体であるため, 西日本方言の 1 つである中予方言の共時的なデータに対しても説明力を持っていない。しかし, 本研究の調査結果において, 大西 (1997) の挿げ替え説では説明不十分な点が 2 点ある。

(28) 語幹長音形 (例: タカー) が挿げ替え説のモデルに組み込まれていない。

(29) 調査結果と大西 (1997) のモデルにおいて矛盾点がある。

(28)に関して, 大西 (1997) の挿げ替え説のモデルは takaku > takau > takoo > tako > taka であるため, 語幹長音形が組み込まれておらず, 調査結果の語幹長音形について説明することができない。

(29)に関して, 挿げ替え説ではタカク > タコー > タコ > タカという変化であるため, ある方言の共時体系を記述する際, 変化の過程を反映した全ての形式が共時的に容認される場合 (「タコー・タコ・タカ」), 変化の直近 2 つの形式が容認される場合 (「*タコー・タコ・タカ」), あるいは最新の形式だけが容認される場合 (「*タコー・*タコ・タカ」) が予測される一方, 変化の過程において近接しない形式が容認されて, 間の形式が容認される (あるいはその逆) 場合 (「タコー・*タコ・タカ」) は考えにくい。しかし, 調査結果では, 実際にこの後者の場合も存在するため, 挿げ替え説のモデルでは説明不可能ということになる。

(30) 60 代女性

顔 {アコー・*アコ・アカ} スルのやめてや。
「顔赤くするのやめて。」

以上の2つの理由により、新たなモデルを提案する必要がある。

4.4.3. 新モデルの提案

本論文において、大西（1997）の挿げ替え説に代わる新たなモデルを提案する。以下、このモデルを「新モデル」と呼ぶ。

以下(31)において、①と②は別ルートで、Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳの順に変化する。

(31) 新モデル

	Step Ⅰ		Step Ⅱ		Step Ⅲ		Step Ⅳ
①	アカク	>	アコー	>	アカー	>	アカ
②					アコー	>	(アコ)

このモデルにおいて、①と②は、アカクが融合し、アコーとなる Step Ⅰ，Step Ⅱまでは全く同一のものである。「アカク」の形は全ての形容詞，後続要素の組み合わせで必ず現れる形である。Step Ⅱでアコーに変化してから，①において，アコーの形に類推してアカクがアカーとなる。この時点で，アコーはまだ残留し，共時システムでアカーと共存する。Step Ⅳでアカーが短音化してアカとなる。一方，②において，この変化に並行的にアコーが短音化しアコになる変化が現在生じつつある。これが新モデルである。

まず，Step Ⅰのアカクは中予方言の現在の体系にも最も広く見られるが，これは標準語化の影響で，すなわち借用によってのちにふたたび使われるようになったと考える。

(32) 別にそのりんごアカクナイやん。
「別にそのりんご赤くないでしょう。」

(33) なんか，あんた味付けがどんどんアマクナルね。
「なんか，あなた味付けがどんどん甘くなるね。」

(34) ごはんカタクスルのやめてや。
「ご飯を固くするのやめて。」

(35) 髪めっちゃナガクテ，びっくりしたわ。
「髪がすごく長くて，びっくりした。」

(36) 紅葉アカク染まってきたね。

「紅葉が赤く染まってきたね。」

軽動詞「ナル・スル」、否定語「ナイ」において、語幹単独形（Step IV）の容認度は非常に高く、方言形式としては最も広い範囲で現れる。「ナイ・ナル・スル」が後続する場合において、ク形以外のいずれかの語形が容認されるとき、語幹単独形も必ず容認される。

そのため、新モデルの①において最も新しい形である「アカ」が残り、古い形である「アコー」、「アカー」が段々と使われなくなっていることが考えられる。

(37) 別にそのりんご {アカ/*アカー/アコ/*アコー} ナイヤん。

「別にそのりんご赤くないじゃん。」

(38) 段々りんごが {アカ/*アカー/アコ/*アコー/} ナル季節やね。

「段々りんごが赤くなる季節だね。」

(39) 顔 {アカ/*アカー/*アコ/アコー} スルのやめてや。

「顔赤くするのやめて。」

また、新モデルの②において、「アコ」は①の「アカ」に移行してから類推で生じつつある最も新しい形であるため、容認度が低くなっていると考えられる。

本論文の調査において、融合短音形「アコ」と語幹長音形「アカー」が共起しにくいということが明らかになった。新モデルにおいて、語幹長音形「アカー」が Step III の位置にあり、融合短音形「アコ」は Step IV の「アカ」からの類推である。「アカー」と「アコ」の発生の順番が隣接していないことから、2つの語形が共起しにくいことが伺える。

(40) 別にそのカレー {アマ/アマー/*アモ/*アモー} ナイヤん。

「別にそのカレー甘くないじゃん。」

(41) 段々りんごが {アカ/*アカー/アコ/*アコー} ナル季節やね。

「段々りんごが赤くなる季節だね。」

(42) なんか、あんた味付けがどんどん {アマ/*アマー/アモ/*アモー} ナルね。

「なんか、あなた味付けがどんどん甘くなるね。」

「ナイ・ナル・スル」が後続する場合において、例外「カタイ+ナル」を除いて、「アコー」が容認される場合、「アカー」が必ず容認されている。①において一番古い形である「アコー」が段々使われなくなり、次に古い形である「アカー」も次第に使われなくなっていることが考えられる。

一般動詞においても、軽動詞・否定語が後続するときと同様に、語幹融合形「アコ」と語幹長音形「アカー」が共起しにくい。

また、一般動詞が後続するとき、語幹単独形「アカ」と融合長音形「アコー」は、互いに共起しにくい関係にある。

- (43) 1人だけ {ナガ/*ナガー/*ナゴ/*ナゴー} 話さんでや。

「1人だけ長く話さないで。」

- (44) そんな {アラ/*アラー/アロ/*アロー} 縫うのやめてや。

「そんなに粗く縫うのやめてよ。」

- (45) 紅葉 {*アカ/*アカー/アコ/アコー} 染まってきたね。

「紅葉赤く染まってきたね。」

- (46) カレー {*アマ/*アマー/アモ/アモー} 作っというてや。

「カレー甘く作っておいて。」

新モデルの①の発生の順番において、アコーとアカは間にアカーを挟んでいるため、共起しにくいということも説明できる。

また、一般動詞においては語幹単独形の容認度は高くない。

- (47) ご飯 {*カタ/カター/*カト/カトー} 炊いというてや。(一般動詞)

「ご飯固く炊いというてよ。」

- (48) 別にその煎餅 {カタ/*カター/カタ/*カトー} ナイヤん。(否定語)

「別にその煎餅固くないじゃん。」

- (49) ご飯どんどん {カタ/*カター/*カタ/カトー} ナルけん早く食べ。(軽動詞)

「ご飯どんどん固くなるから早く食べ。」

- (50) ご飯 {カタ/*カタール/カタ/*カトー} スルのやめてや。(軽動詞)
「ご飯固くするのやめて。」

一般動詞が後続する場合においては、軽動詞「ナル・スル」、否定語「ナイ」のときよりも、①の Step IIIから Step IVにかけての類推の進みが遅いことが考えられる。

5. 形容詞連用諸形式に与格がつく場合

本研究の調査で、形容詞連用諸形式に与格のニが接続した形式も確認できた。

- (51) 顔アコーニスルのやめてや。
「顔赤くするのやめて。」

これは愛媛県方言に関する先行研究には報告がなかったものであるが、中国地方の方言などで確認できる形式である。以下では、この形式（与格接合連用諸形式）に関する使用条件を明らかにする。

5.1. 与格接合連用諸形式と後続要素の関係

表 6 は、与格接合連用諸形式のそれぞれがどの後続要素と共起するかに関する調査結果をまとめたものである。表の見方については、表 5 と同様である。

表 6. 与格接合連用諸形式と後続要素

形容詞\ 語形+ニ	語幹 +ニ	語幹長音 +ニ	融合短音 +ニ	融合長音 +ニ
アカイ	*Ni, *Nr, *Sr, —, *Vr	*Ni, *Nr, (Sr), —, (Vr)	*Ni, *Nr, *Sr, —, *Vr	*Ni, *Nr, (Sr), —, (Vr)
カタイ	*Ni, *Nr, (Sr), —, (Vr)	*Ni, *Nr, (Sr), —, (Vr)	*Ni, *Nr, *Sr, —, *Vr	*Ni, *Nr, (Sr), —, (Vr)
アライ	*Ni, *Nr, (Sr), —, (Vr)	*Ni, *Nr, (Sr), —, (Vr)	*Ni, *Nr, *Sr, —, *Vr	*Ni, *Nr, (Sr), —, (Vr)
アマイ	*Ni,	*Ni,	*Ni,	*Ni,

	*Nr, (Sr), —, (Vr)	*Nr, (Sr), —, (Vr)	*Nr, *Sr, —, (Vr)	*Nr, (Sr), —, (Vr)
クサイ	*Ni, *Nr, (Sr), *Vs, —	*Ni, *Nr, (Sr), *Vs, —	*Ni, *Nr, *Sr, *Vs, —	*Ni, *Nr, (Sr), *Vs, —
ナガイ	*Ni, *Nr, *Sr, (Vs), —	*Ni, *Nr, (Sr), (Vs), —	*Ni, *Nr, *Sr, *Vs, —	*Ni, (Nr), (Sr), (Vs), —

この結果から言える特徴を以下に述べる。

5.1.1. 与格が接合する連用諸形式について

語根 3 モーラの形容詞を除くと、語幹長音形＋ニが容認される場合、融合長音形＋ニも容認される。すなわち、融合長音形の方が「ニ」が付きやすいということが考えられる。

(52) アカーニ {*ナイ/*ナル/スル/*テ/*一般動詞}

(53) アコーニ {*ナイ/*ナル/スル/*テ/一般動詞}

5.1.2. 後続要素について

まず、与格接合形式と共起しうるのは軽動詞「ナル・スル」と一般動詞である。次に、形容詞＋ニ＋ナルが容認される場合、形容詞＋ニ＋スルも容認されるという関係がある。すなわち、スルの方が「ニ」が付きやすく、ナルの方が「ニ」が付きにくいということが考えられる。

(54) 段々ご飯 {*カタ/*カター/*カト/*カトー} ニナルけん早く食べ。
「段々ご飯固くなるから早く食べなさい。」

(55) ご飯 {*カト/カター/*カト/カトー} ニスルのやめてや。
「ご飯固くするのやめて。」

(56) ほっといたら爪 {*ナガ/*ナガー/*ナゴ/ナゴー} ニナルけん早く切り。
「放っておいたら爪長くなるから早く切りなさい。」

- (57) 休憩もっと {*ナガ/ナガー/*ナゴ/ナゴー} ニスルわ。
「休憩もっと長くするね。」

すでに 4.4.2.節で述べたように、後続要素が軽動詞「ナル・スル」、否定語「ナイ」の場合、連用諸形式は語幹単独形の容認度が高く、後続要素が一般動詞の場合は、語幹単独形の容認度が低くなる。一方、与格接合形式に関して、後続要素が軽動詞、否定語では語幹単独形、融合短音形のような短音形にニが付く場合は一例を除いて容認されず、長音形にニが付くときのみ容認されている。しかし、一般動詞はこの限りではなく、ニが付く範囲が広がっている。すなわち、形容詞＋ニ＋軽動詞、否定語が容認された場合、形容詞＋ニ＋一般動詞も容認されると考えられる。

- (58) あんた手つきどンドン {*アラ/アラー/*アロ/アロー} ニナルね。(軽動詞)
「あなたの手つきどンドン粗くなるね。」

- (59) そんな {アラ/アラー/アロ/アロー} ニ縫うのやめてや。(一般動詞)
「そんなに粗く縫うのやめて。」

5.2. 与格接合名詞と与格接合連用諸形式の並行性

連用諸形式に与格が接合する法則性について、以下で検討する。

5.2.1. 与格接合連用諸形式

本論文の調査結果において、与格接合連用諸形式は、後続要素が「ナル」の場合より「スル」の場合に容認されやすいということが明らかになった。この点について注目されるのは、与格接合名詞（名詞＋ニ）と並行的であることである。筆者の内省では、与格接合名詞は後続要素が「スル」の場合に必須であるが、「ナル」の場合は随意的である。

- (60) a. あの人の先生ニナルんよ。
「あの人の先生になるんだよ。」

- b. あの人の先生ナルんよ。

- (61) a. この野菜、煮物ニスルんよ
「この野菜、煮物にするんだよ。」

- b. *この野菜、煮物スルんよ

この並行性から、ここまで想定してきたように、形容詞連用諸形式に接合するニを名詞につく与格ニと認定すべきであることがわかる。

5.2.2. 与格の方向性

形容詞の後続要素がナル・スルの場合、連用諸形式が名詞と並行的になるという特徴を持っていることが本論文の調査により明らかになった。しかし、なぜ形容詞の連用諸形式に名詞の様に与格が付くのかについて説明する。

名詞においても、形容詞においても「変化を伴っている・方向性を持った」後続要素の方が与格の「ニ」が付きやすいということが考えられる。

与格の「ニ」の意味として方向性を持っており、名詞、形容詞のどちらの場合にも、方向性を持った後続要素の前により出やすくなっているということが考えられる。

すなわち、方向性をもった変化の結果である「スル」の方が、自然に起こる変化の結果である「ナル」よりも与格の「ニ」が付きやすいと考えられる。

下地（2016）は、南琉球宮古伊良部長浜方言において、方向格=*nkai* という格助詞があることを指摘している。移動動詞と共に移動の方向や着点を表すとされ、おおまかに日本語共通語の「へ」に相当すると考えられてきた（名嘉真 2000）。

また、方向格は多くの場合、与格=*n*（「に」「で」）で置き換えることもできることも指摘しており、「ナル」が後続する場合、「スル」が後続する場合で以下(62)-(63)のような使い分けが起こる、としている。

(62) *sinsii=n/nkai=du nartar.*

「先生になった」（主に内発変化）

[下地 2016: 64]

(63) *zzu=u nicki=nkai=du nastar.*

「魚を煮付けにした」（外発変化）

[下地 2016: 64]

下地（2016）は「ナル」が後続されている(62)の例文を「内発変化」とし、「スル」が後続されている(63)の例文を「外発変化」としている。

(62)の「ナル」後続に関しては、ほぼ与格で容認され、(63)の「スル」後続に関しては、ほぼ方向格で容認されている。これは、方向格が基本的に移動の方向や到達点を示すという先行研究の考察と一致している。

5.1.2.節の場合、「スル」と「ナル」において、上記の通りスルの方が働きかけているニュアンスを持っているため、ニが付きやすくなっている可能性がある。

- (64) *段々ご飯カターニナルけん早く食べ。
「段々ご飯固くなるから早く食べなさい。」

- (65) ご飯カターニスルのやめてや。
「ご飯固くするのやめて。」

今回の調査では、一般動詞に様態と結果という区別を付けるに留まったが、スル、ナルのように、自然になっている動詞と働きかけるニュアンスを持った動詞とで分けて考えると、変化を伴う意味を持っている一般動詞である方が「ニ」が付きやすくなる可能性がある。

実際に、動作主が対象物に働きかけるようなニュアンスを持った例文と、動作主は何も手を加えず自然に起こったことのようなニュアンスを持った例文とでは、話者の容認度にも変化が現れている。

- (66) *紅葉めっちゃアカーニ染まってきたね
「紅葉すごく赤く染まってきたね。」

- (67) ご飯カターニ炊いといてや。
「ご飯固く炊いといて。」

(66)では、手を加えずとも紅葉が自然に染まることがわかるが、(67)では、自分、または他人といった動作主が手を加えている、働きかける意味を持っている。

「ナル」と「スル」において比較したときに、ナルよりもスルの方が「ニ」が付きやすいという結果が出たように、動詞についても「自然に変化する」動詞と「手を加えて変化する」動詞に分類することで、「ニ」の付きやすさが変化する可能性がある。その分類方法については、今後の課題としたい。

6. 語根 1 モーラ形容詞について

久保（2018）は「ナイ」「エー」について、「語幹 1 拍」と表現し、その場合、ナイ・ナル・テが後続するときは必ず交替が起こり、長音化でのみ実現するとしている。すなわち、語根 1 モーラ形容詞は融合長音形でのみ容認される、と示している。

表 7. 語根 1 モーラ形容詞の活用（久保（2018: 93）を参照し筆者作成）

後続要素\形容詞	ナイ	エー
ナイ	ー	ヨーナイ
ナル	ノーナル	ヨーナル
テ	ノーテ	ヨーテ

語根 1 モーラの形容詞ナイ・ヨイ・コイにおいて、ナイ・ナル・テ・スル・一般動詞（様態・結果）が後続するとき、先行研究には出なかった新たな語形が出る結果となった。

語幹+i : コイ, ナイ

語幹+i 長音 : コイー

語幹+i 長音+ニ : コイーニ

語幹+i+ク : コイク

形容詞ごとに、語形について詳述する。

6.1. コイ

語根 1 モーラ形容詞「コイ」について、形容詞連用形を見ていくと、以下のような結果となる。

- (68) a. コイ...容認できる（個人差なし）
b. （コイ）...個人差があり、容認できる場合とできない場合がある
c. ー...調査結果なし

表 8. 「コイ」の形容詞連用形

後続要素\形容詞	「コイ」
ナイ	コク, (コイ), (コイー), コイク
ナル	コク, (コイ), (コイーニ), コイク
スル	コク, (コイ), (コイーニ), コイク, (コー), (コーニ)
テ	コク, (コイー), コー
一般動詞（様態）	ー
一般動詞（結果）	コク, (コイー), (コイーニ), コイク

語根 1 モーラ形容詞「コイ」において、再分析が起こっていると考えられる。すなわち、ko-i の i が取り込まれて「コイ」自体が語幹のようになっていると考える。この場合、「コイ」のク形は「コイク」、コイの語幹単独形は「コイ」、「コイ」の語幹長音形は「コイー」であると考えることが出来る。

また、「コイ」において、ク形である「コク」が標準語として容認される場合も多く、方言として日常的に使う言葉としては容認しにくいという意見もある。話者の中では、終止形は語根 1 モーラ形容詞「コイ」ではなく、語根 2 モーラ形容詞の「コイー」と認識されており、語幹「コ」＋「ク」である「コク」よりも、語幹「コイ」＋「ク」の方がより容認されやすい可能性がある。「スル」や「テ」が後続する場合には、「コイ」の語幹である「コ」がそのまま長音化した「コー」という形が容認されているため、語幹が「コ」であるときと「コイ」であるときの 2 つの場合があると考えられる。

(69) a. ko-i : 語幹が「コ」(最小語制約により容認されない)

語幹単独形 : ×

語幹長音形 : コー

融合短音形 : ×

融合長音形 : ×

b. koi-i : 語幹が「コイ」

語幹単独形 : コイ

語幹長音形 : コイー

融合短音形 : ×

融合長音形 : ×

6.2. ナイ

語根 1 モーラ形容詞「ナイ」について、形容詞連用形を見ていくと、以下のような結果となる。表 9 の見方については、表 8 と同様である。

表 9. 「ナイ」の形容詞連用形

後続要素\形容詞	「ナイ」
ナイ	—
スル	—
テ	ナク, (ナー), (ノー)
一般動詞(様態)	—

一般動詞(結果)	—
----------	---

「ナイ」においても、「コイ」と同じで再分析が起こっていると考える。

(70) a. na-i : 語幹が「ナ」(最小語制約により, 容認されない)

語幹単独形 : ×

語幹長音形 : ナー

融合短音形 : ×

融合長音形 : ノー

b. koi-i : 語幹が「ナイ」

語幹単独形 : ナイ

語幹長音形 : ナイー

融合短音形 : ×

融合長音形 : ×

しかし, ナイはク形である「コイク」「アカク」のように「ナイク」となったり, 語幹長音形の「コイー」「アカー」のように「ナイー」となったりすることはない。

6.3. ヨイ

語根 1 モーラ形容詞「ヨイ」について, 形容詞連用形を見ていくと, 以下のような結果となる。表 10 の見方については, 表 8 と同様である。

表 10. 「ヨイ」の形容詞連用形

後続要素\形容詞	「ヨイ」
ナイ	ヨク, (ヨー), (エー)
ナル	ヨク, (ヨー), (エー)
スル	ヨク, (ヨー), (ヨーニ), (エー), (エーニ)
テ	ヨク, ヨー
一般動詞(様態)	ヨク, (ヨー), (ヨーニ)
一般動詞(結果)	—

「ヨイ」について、語形は以下の様になると考えられる。

- (71) yo-i : 語幹「ヨ」(最小語制約により、容認されない)

語幹 : ×

語幹長音形 : ×

融合短音形 : ×

融合長音形 : ヨー

「エー」については、4つの語形のどれにも当てはまらない。

- (72) a. koi-i,

b. yoi-Ø

yo-i の形態素境界が消え、「ヨイ」の部分が語幹の様になる異分析が起こっている。すなわち、「コイー」と「エー」を平行的に考えると、「エー」は終止形である。

以下のように、「コイー」が出てくるときに「エー」も出てきている。また、「コイーニ」が出てくる際に「エーニ」も出てきている。

- (73) なんか、このコーヒーコイーナルね。

「なんか、このコーヒー濃くなるね。」

- (74) よかった、コイーナルね。

「よかった、顔色良くなるね。」

- (75) コーヒーコイーニスルのやめてや。

「コーヒー濃くするのやめて。」

- (76) もうちょっと姿勢エーニスルわ。

「もう少し姿勢良くなるね。」

7. おわりに

本論文では、愛媛県中予方言における形容詞連用形の語形を記述した。語根が2モーラであり、語幹末母音がaの形容詞にナイ・ナル・テ・スル・一般動詞(様態・結果)が後続する場合、通時的には大西(1997)の挿げ替え説に矛盾する結果となった。そのため、アカク>アコー>アカー>アカ、アカク>アコー>アコという新たなモデルを提案す

るに至った。また、共時的には、「ナル」より「スル」の方が「ニ」が付きやすく、「変化を伴う後続要素」の方が「ニ」が付きやすいことが明らかになった。加えて、1モーラ語根形容詞においては、再分析が起こっており、i が取り込まれた形そのものが語幹の様になっていることが明らかになった。

今後の課題は以下に述べるとおりである。今回の調査では語根2モーラ形容詞、語幹末母音が a の形容詞、また、語根1モーラ形容詞を分析するのにとどまった。そのため、語根3モーラ形容詞、語幹末母音が i, u, o の形容詞については、調査、分析の余地がある。

語根3モーラ形容詞「ウレシイ」について、久保（2018）は、融合して「ウレシュー」となる、としている。しかし、調査で融合は起こらなかった。

(77) そんなことされても別に {ウレシク/ウレシ/*ウレシー/*ウレシュュー/*ウレシュ} ないよ。

「そんなことされても別に嬉しくないよ。」

語根3モーラ形容詞、語幹末母音が i, u, o の形容詞について、今後分析を進めていくこととする。また、語根2モーラ、語幹末母音 a の形容詞においてもより正確な一般化をし、新モデルの裏付けを進めることとする。大西（1997）の挿げ替え説を批判し、新モデルの提案を行ったが、これは本論文の調査結果の一般化に限ったモデルである。大西（1997）に代わるモデルについては、話者をより高年層に設定した調査を行うなど、より妥当なものを作成する必要がある。

また、ク形るとき、全ての後続要素が容認されると4.4.2節で指摘したが、話者の中には、ク形は標準語として容認される場合も多く、方言として日常的に使う言葉としては容認できないという意見もある。

(78)の例文がク形しか容認されず、かつ、話者が標準語のように認識した理由として、愛媛県中予方言のテ形の機能が、原因・結果までは表せないから、という可能性がある。

(78)の例文では、原因・結果の意味を表す「ケン」が、第一回答として得られた。

(78) りんごめっちゃアカイケン、美味しそうやね。

「りんごがすごく赤くて、美味しそうだね。」

本来、愛媛県中予方言のテ形の機能として原因・結果の意味を含んでいないため、話者にテ形を強制的に使わせようとする、標準語のように感じてしまう可能性がある。

以上のことは、まだ根拠が不十分なため、再度調査していく必要がある。

参考文献

- 榎垣実（1944）「近畿方言の形容詞」『方言研究』10. [井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎（1996）『近畿方言考 1 近畿一般』245-258. 東京：ゆまに書房. 所収]
- 榎垣実（1962）「近畿方言総説」榎垣実（編）『近畿方言の総合的研究』1-59. 東京：三省堂.
- 江端義夫（1987）「「早く」（形容詞連用形）の方言分布—中部日本地方域の方言について—」『広島大学教育学部紀要 第2部』36: 37-44.
- 愛媛大学方言ゼミナール（編）（1981）『愛媛県言語地図集』愛媛：愛媛大学方言ゼミナール.
- 大西拓一郎（1997）「活用の整合化—方言における形容詞の「無活用化」、形容動詞のダナ活用の交替などをめぐる問題—」加藤正信（編）『日本語の歴史地理構造』518(87)-503(102). 東京：明治書院.
- 久保博雅（2018）「愛媛県松山市方言」方言文法研究会（編）『全国方言文法辞典資料集 (4) 活用体系 (3)』87-95. 大阪：方言文法研究会.
- 国立国語研究所（1993）『方言文法全国地図 第3集 活用編 2』東京：大蔵省印刷局.
- 下地理則（2016）「南琉球宮古伊良部長浜方言の方向格=*nkai* と与格=*n*」狩俣繁久（編）『琉球諸語記述文法Ⅱ』61-85. 沖縄：琉球大学.
- 杉山正世（1964）「愛媛県の方言区画」日本方言研究会（編）『日本の方言区画』446-458. 東京：東京堂出版.
- 名嘉真三成（2000）『琉球方言の意味論』東京：ルック.

付録

付録 1 は、調査で使った例文を載せている。

付録 2 は、調査結果を話者ごとに、連用諸形式と与格が付く場合の 2 つを載せている。

付録 1（例文）

【ナイ・ナル・テ】

形容詞\後続要素	ナイ	ナル	テ
アカイ	別にそのりんごアカクナイやん	段々りんごがアカクナル季節やね	りんごめっちゃアカクテ、美味しそうやね
アマイ	別にそのカレーアマクナイやん	なんか、あんた味付けがどんどんアマクナルね	カレーめっちゃアマクテ、びっくりしたわ
カタイ	別にその煎餅カタクナイやん	段々ご飯カタクナルけん早く食べ	煎餅めっちゃカタクテ、噛み砕けんね
アライ	別にその縫い目アラクナイやん	あんた手つき段々アラクナルね	縫い目めっちゃアラクテ、びっくりしたわ
クサイ	別に納豆クサクナイやん	はやくゴミ捨てんと部屋クサクナルよ	なんかめっちゃクサクテ、気分悪いわ
ナガイ	あんたの髪ナガクナイやん	ほっといたら爪ナガクナルけんはよきり	髪めっちゃナガクテ、鬱陶しそうやね
ナイ	ー	なんか、お菓子ナクナルの早いね	もうお菓子ナクテ、がっかりしたわ
コイ	別にこのコーヒーコクナイやん	なんかこのコーヒーどんどんコクナルね	コーヒーめっちゃコクテ、びっくりしたわ
ヨイ	その言い方はヨクナイよ	よかった、どンドン顔色ヨクナルね	思ってたより全然ヨクテ、びっくりしたわ

【スル・一般動詞（様態）・一般動詞（結果）】

形容詞\ 後続要素	スル	一般動詞（様態）	一般動詞（結果）
アカイ	顔アカクスルのや めてや	—	紅葉アカク染まってきた ね
アマイ	カレーアマクスル のやめてや	—	カレーアマク作っという てや
カタイ	ご飯カタクスルの やめてや	—	ご飯カタク炊いというてや
アライ	手つきアラクスル のやめてや	—	そんなアラク縫うのやめ てや
クサイ	ゴミで部屋クサク するのやめてや	めっちゃクサク匂っ とるね	—
ナガイ	休憩もっとナガク スルわ	一人だけナガク話 さんでや	—
ナイ	—	—	—
コイ	コーヒーコクスル のやめてや	—	もうちょっとコー ヒーコク淹れとい て
ヨイ	もうちょっと姿勢 ヨクスルわ	あの子のことそん なヨク思わんのよ ね	—

付録 2（調査結果）

○…話者が自分で言うことができる

×…話者が自分で言わない，又は違和感がある

△…話者が標準語のように感じる

—…調査結果なし

【60 代女性（連用諸形式）】

話者	後続要素	形容詞	語幹	語幹長音	融合短音	融合長音
60 代女性	ナイ	アカイ	○	×	○	×
60 代女性	ナイ	アマイ	○	○	×	×
60 代女性	ナイ	カタイ	○	×	○	×
60 代女性	ナイ	アライ	○	×	○	×

60 代女性	ナイ	クサイ	○	×	×	×
60 代女性	ナイ	ナガイ	○	×	×	×
60 代女性	ナル	アカイ	○	×	○	×
60 代女性	ナル	アマイ	○	×	○	×
60 代女性	ナル	カタイ	○	×	×	○
60 代女性	ナル	アライ	○	×	○	×
60 代女性	ナル	クサイ	○	×	×	×
60 代女性	ナル	ナガイ	○	×	○	×
60 代女性	スル	アカイ	○	×	×	○
60 代女性	スル	アマイ	○	×	○	×
60 代女性	スル	カタイ	○	×	○	×
60 代女性	スル	アライ	○	×	○	×
60 代女性	スル	クサイ	○	×	×	×
60 代女性	スル	ナガイ	○	×	○	○
60 代女性	テ	アカイ	×	×	×	×
60 代女性	テ	アマイ	×	×	×	×
60 代女性	テ	カタイ	×	×	×	×
60 代女性	テ	アライ	×	○	×	○
60 代女性	テ	クサイ	×	○	×	○
60 代女性	テ	ナガイ	×	○	×	○
60 代女性	一般動詞(様態)	アカイ	—	—	—	—
60 代女性	一般動詞(様態)	アマイ	—	—	—	—
60 代女性	一般動詞(様態)	カタイ	—	—	—	—
60 代女性	一般動詞(様態)	アライ	—	—	—	—
60 代女性	一般動詞(様態)	クサイ	×	×	×	○
60 代女性	一般動詞(様態)	ナガイ	○	×	×	×
60 代女性	一般動詞(結果)	アカイ	×	○	×	○
60 代女性	一般動詞(結果)	アマイ	×	×	○	○
60 代女性	一般動詞(結果)	カタイ	×	×	○	○
60 代女性	一般動詞(結果)	アライ	○	×	○	×
60 代女性	一般動詞(結果)	クサイ	—	—	—	—
60 代女性	一般動詞(結果)	ナガイ	—	—	—	—

【60 代女性（与格が付く場合）】

話者	後続要素	形容詞	ク	語幹 +ニ	語幹長 音+ニ	融合短 音+ニ	融合長 音+ニ
60代女性	ナイ	アカイ	○	×	×	×	×
60代女性	ナイ	アマイ	○	×	×	×	×
60代女性	ナイ	カタイ	○	×	×	×	×
60代女性	ナイ	アライ	○	×	×	×	×
60代女性	ナイ	クサイ	○	×	×	×	×
60代女性	ナイ	ナガイ	○	×	×	×	×
60代女性	ナル	アカイ	○	×	×	×	×
60代女性	ナル	アマイ	△	×	×	×	×
60代女性	ナル	カタイ	○	×	×	×	×
60代女性	ナル	アライ	△	×	○	×	○
60代女性	ナル	クサイ	△	×	×	×	×
60代女性	ナル	ナガイ	○	×	×	×	○
60代女性	スル	アカイ	△	×	○	×	○
60代女性	スル	アマイ	△	×	×	×	×
60代女性	スル	カタイ	○	×	○	×	○
60代女性	スル	アライ	△	×	○	×	○
60代女性	スル	クサイ	△	○	○	×	×
60代女性	スル	ナガイ	△	×	○	×	○
60代女性	テ	アカイ	○	×	×	×	×
60代女性	テ	アマイ	○	×	×	×	×
60代女性	テ	カタイ	○	×	×	×	×
60代女性	テ	アライ	○	×	×	×	×
60代女性	テ	クサイ	○	×	×	×	×
60代女性	テ	ナガイ	○	×	×	×	×
60代女性	一般動詞(様態)	アカイ	—	—	—	—	—
60代女性	一般動詞(様態)	アマイ	—	—	—	—	—
60代女性	一般動詞(様態)	カタイ	—	—	—	—	—
60代女性	一般動詞(様態)	アライ	—	—	—	—	—
60代女性	一般動詞(様態)	クサイ	△	×	○	×	×
60代女性	一般動詞(様態)	ナガイ	△	○	○	○	○
60代女性	一般動詞(結果)	アカイ	△	×	×	×	○

60 代女性	一般動詞(結果)	アマイ	△	×	×	×	○
60 代女性	一般動詞(結果)	カタイ	△	×	○	×	○
60 代女性	一般動詞(結果)	アライ	△	○	○	○	○
60 代女性	一般動詞(結果)	クサイ	—	—	—	—	—
60 代女性	一般動詞(結果)	ナガイ	—	—	—	—	—

【60 代男性（連用諸形式）】

話者	後続要素	形容詞	語幹	語幹長音	融合短音	融合長音
60 代男性	ナイ	アカイ	○	○	×	×
60 代男性	ナイ	アマイ	○	○	×	×
60 代男性	ナイ	カタイ	○	○	×	○
60 代男性	ナイ	アライ	○	○	×	×
60 代男性	ナイ	クサイ	○	○	×	×
60 代男性	ナイ	ナガイ	○	○	×	○
60 代男性	ナル	アカイ	○	○	○	○
60 代男性	ナル	アマイ	○	○	○	○
60 代男性	ナル	カタイ	○	○	○	○
60 代男性	ナル	アライ	○	○	○	○
60 代男性	ナル	クサイ	○	○	○	○
60 代男性	ナル	ナガイ	○	○	○	○
60 代男性	スル	アカイ	○	○	○	○
60 代男性	スル	アマイ	○	○	○	○
60 代男性	スル	カタイ	○	○	○	○
60 代男性	スル	アライ	○	○	○	○
60 代男性	スル	クサイ	○	○	○	○
60 代男性	スル	ナガイ	○	○	○	○
60 代男性	テ	アカイ	×	×	×	○
60 代男性	テ	アマイ	×	×	×	○
60 代男性	テ	カタイ	×	×	×	○
60 代男性	テ	アライ	×	×	×	○
60 代男性	テ	クサイ	×	×	×	○
60 代男性	テ	ナガイ	×	×	×	○
60 代男性	一般動詞(様態)	アカイ	—	—	—	—

60 代男性	一般動詞(様態)	アマイ	—	—	—	—
60 代男性	一般動詞(様態)	カタイ	—	—	—	—
60 代男性	一般動詞(様態)	アライ	—	—	—	—
60 代男性	一般動詞(様態)	クサイ	○	○	○	○
60 代男性	一般動詞(様態)	ナガイ	○	○	○	○
60 代男性	一般動詞(結果)	アカイ	○	○	○	○
60 代男性	一般動詞(結果)	アマイ	○	○	○	○
60 代男性	一般動詞(結果)	カタイ	○	○	○	○
60 代男性	一般動詞(結果)	アライ	○	○	○	○
60 代男性	一般動詞(結果)	クサイ	—	—	—	—
60 代男性	一般動詞(結果)	ナガイ	—	—	—	—

【60 代男性（与格が付く場合）】

話者	後続要素	形容詞	ク	語幹	語幹長音＋二	融合短音＋二	融合長音＋二
60 代男性	ナイ	アカイ	○	×	×	×	×
60 代男性	ナイ	アマイ	○	×	×	×	×
60 代男性	ナイ	カタイ	○	×	×	×	×
60 代男性	ナイ	アライ	○	×	×	×	×
60 代男性	ナイ	クサイ	○	×	×	×	×
60 代男性	ナイ	ナガイ	○	×	×	×	×
60 代男性	ナル	アカイ	○	×	○	×	○
60 代男性	ナル	アマイ	○	×	○	×	×
60 代男性	ナル	カタイ	○	×	×	×	×
60 代男性	ナル	アライ	○	×	×	×	×
60 代男性	ナル	クサイ	○	×	×	×	×
60 代男性	ナル	ナガイ	○	×	×	×	×
60 代男性	スル	アカイ	○	×	×	×	○
60 代男性	スル	アマイ	○	×	○	×	○
60 代男性	スル	カタイ	○	○	○	×	○
60 代男性	スル	アライ	○	×	○	×	○
60 代男性	スル	クサイ	○	×	○	×	○
60 代男性	スル	ナガイ	○	×	○	×	○

60 代男性	テ	アカイ	○	×	×	×	×
60 代男性	テ	アマイ	○	×	×	×	×
60 代男性	テ	カタイ	○	×	×	×	×
60 代男性	テ	アライ	○	×	×	×	×
60 代男性	テ	クサイ	○	×	×	×	×
60 代男性	テ	ナガイ	○	×	×	×	×
60 代男性	一般動詞(様態)	アカイ	○	—	—	—	—
60 代男性	一般動詞(様態)	アマイ	○	—	—	—	—
60 代男性	一般動詞(様態)	カタイ	○	—	—	—	—
60 代男性	一般動詞(様態)	アライ	○	—	—	—	—
60 代男性	一般動詞(様態)	クサイ	○	—	—	—	—
60 代男性	一般動詞(様態)	ナガイ	○	○	○	×	○
60 代男性	一般動詞(結果)	アカイ	○	×	○	×	○
60 代男性	一般動詞(結果)	アマイ	○	○	○	○	○
60 代男性	一般動詞(結果)	カタイ	○	○	○	×	○
60 代男性	一般動詞(結果)	アライ	○	×	○	×	○
60 代男性	一般動詞(結果)	クサイ	○	—	—	—	—
60 代男性	一般動詞(結果)	ナガイ	○	—	—	—	—

【50 代女性（連用諸形式）】

話者	後続要素	形容詞	語幹	語幹長音	融合短音	融合長音
50 代女性	ナイ	アカイ	○	×	×	×
50 代女性	ナイ	アマイ	○	×	×	×
50 代女性	ナイ	カタイ	×	×	×	×
50 代女性	ナイ	アライ	×	×	×	×
50 代女性	ナイ	クサイ	×	×	×	×
50 代女性	ナイ	ナガイ	○	×	×	×
50 代女性	ナル	アカイ	○	×	×	×
50 代女性	ナル	アマイ	○	×	×	×
50 代女性	ナル	カタイ	×	×	×	×
50 代女性	ナル	アライ	×	×	×	×
50 代女性	ナル	クサイ	×	×	×	×
50 代女性	ナル	ナガイ	×	×	×	×

50 代女性	スル	アカイ	×	×	×	×
50 代女性	スル	アマイ	×	×	×	×
50 代女性	スル	カタイ	×	×	×	×
50 代女性	スル	アライ	×	×	×	×
50 代女性	スル	クサイ	×	×	×	×
50 代女性	スル	ナガイ	×	×	×	×
50 代女性	テ	アカイ	×	×	×	×
50 代女性	テ	アマイ	×	×	×	×
50 代女性	テ	カタイ	×	×	×	×
50 代女性	テ	アライ	×	×	×	×
50 代女性	テ	クサイ	×	×	×	×
50 代女性	テ	ナガイ	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(様態)	アカイ	—	—	—	—
50 代女性	一般動詞(様態)	アマイ	—	—	—	—
50 代女性	一般動詞(様態)	カタイ	—	—	—	—
50 代女性	一般動詞(様態)	アライ	—	—	—	—
50 代女性	一般動詞(様態)	クサイ	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(様態)	ナガイ	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(結果)	アカイ	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(結果)	アマイ	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(結果)	カタイ	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(結果)	アライ	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(結果)	クサイ	—	—	—	—
50 代女性	一般動詞(結果)	ナガイ	—	—	—	—

【50 代女性（与格が付く場合）】

話者	後続要素	形容詞	ク	語幹 十二	語幹長音 十二	融合短音 十二	融合長音 十二
50 代女性	ナイ	アカイ	○	×	×	×	×
50 代女性	ナイ	アマイ	○	×	×	×	×
50 代女性	ナイ	カタイ	○	×	×	×	×
50 代女性	ナイ	アライ	○	×	×	×	×
50 代女性	ナイ	クサイ	○	×	×	×	×

50 代女性	ナイ	ナガイ	○	×	×	×	×
50 代女性	ナル	アカイ	○	×	×	×	×
50 代女性	ナル	アマイ	○	×	×	×	×
50 代女性	ナル	カタイ	○	×	×	×	×
50 代女性	ナル	アライ	○	×	×	×	×
50 代女性	ナル	クサイ	○	×	×	×	×
50 代女性	ナル	ナガイ	○	×	×	×	×
50 代女性	スル	アカイ	○	×	×	×	×
50 代女性	スル	アマイ	○	×	×	×	×
50 代女性	スル	カタイ	○	×	×	×	×
50 代女性	スル	アライ	○	×	×	×	×
50 代女性	スル	クサイ	○	×	×	×	×
50 代女性	スル	ナガイ	○	×	×	×	×
50 代女性	テ	アカイ	○	×	×	×	×
50 代女性	テ	アマイ	○	×	×	×	×
50 代女性	テ	カタイ	○	×	×	×	×
50 代女性	テ	アライ	○	×	×	×	×
50 代女性	テ	クサイ	○	×	×	×	×
50 代女性	テ	ナガイ	○	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(様態)	アカイ	—	—	—	—	—
50 代女性	一般動詞(様態)	アマイ	—	—	—	—	—
50 代女性	一般動詞(様態)	カタイ	—	—	—	—	—
50 代女性	一般動詞(様態)	アライ	—	—	—	—	—
50 代女性	一般動詞(様態)	クサイ	○	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(様態)	ナガイ	○	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(結果)	アカイ	○	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(結果)	アマイ	○	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(結果)	カタイ	○	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(結果)	アライ	○	×	×	×	×
50 代女性	一般動詞(結果)	クサイ	—	—	—	—	—
50 代女性	一般動詞(結果)	ナガイ	—	—	—	—	—

【50 代男性（連用諸形式）】

話者	後続要素	形容詞	語幹	語幹長音	融合短音	融合長音
50 代男性	ナイ	アカイ	○	×	○	×
50 代男性	ナイ	アマイ	○	×	○	×
50 代男性	ナイ	カタイ	○	×	○	×
50 代男性	ナイ	アライ	○	×	×	×
50 代男性	ナイ	クサイ	○	×	×	×
50 代男性	ナイ	ナガイ	○	×	○	×
50 代男性	ナル	アカイ	○	×	○	×
50 代男性	ナル	アマイ	○	○	○	×
50 代男性	ナル	カタイ	○	×	×	×
50 代男性	ナル	アライ	○	×	×	×
50 代男性	ナル	クサイ	○	×	×	×
50 代男性	ナル	ナガイ	○	×	×	×
50 代男性	スル	アカイ	○	×	×	×
50 代男性	スル	アマイ	○	×	×	×
50 代男性	スル	カタイ	○	×	×	×
50 代男性	スル	アライ	○	×	×	×
50 代男性	スル	クサイ	○	×	×	×
50 代男性	スル	ナガイ	○	×	×	×
50 代男性	テ	アカイ	×	×	×	×
50 代男性	テ	アマイ	×	×	×	×
50 代男性	テ	カタイ	×	×	×	×
50 代男性	テ	アライ	×	×	×	○
50 代男性	テ	クサイ	×	×	×	○
50 代男性	テ	ナガイ	×	×	×	○
50 代男性	一般動詞(様態)	アカイ	—	—	—	—
50 代男性	一般動詞(様態)	アマイ	—	—	—	—
50 代男性	一般動詞(様態)	カタイ	—	—	—	—
50 代男性	一般動詞(様態)	アライ	—	—	—	—
50 代男性	一般動詞(様態)	クサイ	×	×	×	×
50 代男性	一般動詞(様態)	ナガイ	×	×	×	×
50 代男性	一般動詞(結果)	アカイ	×	×	×	×
50 代男性	一般動詞(結果)	アマイ	○	×	×	×
50 代男性	一般動詞(結果)	カタイ	×	×	×	×

50 代男性	一般動詞(結果)	アライ	×	×	×	×
50 代男性	一般動詞(結果)	クサイ	—	—	—	—
50 代男性	一般動詞(結果)	ナガイ	—	—	—	—

【50 代男性（与格が付く場合）】

話者	後続要素	形容詞	ク	語幹＋ ニ	語幹長 音＋ニ	融合短音 ＋ニ	融合長 音＋ニ
50 代男性	ナイ	アカイ	○	×	×	○	×
50 代男性	ナイ	アマイ	○	×	×	×	×
50 代男性	ナイ	カタイ	○	×	×	×	×
50 代男性	ナイ	アライ	○	×	×	×	×
50 代男性	ナイ	クサイ	○	×	×	×	×
50 代男性	ナイ	ナガイ	○	×	×	×	×
50 代男性	ナル	アカイ	○	×	○	×	○
50 代男性	ナル	アマイ	○	×	○	×	○
50 代男性	ナル	カタイ	○	×	○	×	○
50 代男性	ナル	アライ	○	×	×	×	○
50 代男性	ナル	クサイ	○	×	×	×	×
50 代男性	ナル	ナガイ	○	×	×	×	×
50 代男性	スル	アカイ	△	×	○	×	○
50 代男性	スル	アマイ	○	×	○	×	○
50 代男性	スル	カタイ	○	×	○	×	○
50 代男性	スル	アライ	○	×	○	×	○
50 代男性	スル	クサイ	○	×	○	×	×
50 代男性	スル	ナガイ	○	×	×	×	×
50 代男性	テ	アカイ	○	×	×	×	×
50 代男性	テ	アマイ	○	×	×	×	×
50 代男性	テ	カタイ	○	×	×	×	×
50 代男性	テ	アライ	○	×	×	×	×
50 代男性	テ	クサイ	○	×	×	×	×
50 代男性	テ	ナガイ	○	×	×	×	×
50 代男性	一般動詞(様態)	アカイ	—	—	—	—	—
50 代男性	一般動詞(様態)	アマイ	—	—	—	—	—

50 代男性	一般動詞(様態)	カタイ	－	－	－	－	－
50 代男性	一般動詞(様態)	アライ	－	－	－	－	－
50 代男性	一般動詞(様態)	クサイ	○	×	×	×	×
50 代男性	一般動詞(様態)	ナガイ	○	×	×	×	○
50 代男性	一般動詞(結果)	アカイ	○	×	○	×	○
50 代男性	一般動詞(結果)	アマイ	○	×	○	×	○
50 代男性	一般動詞(結果)	カタイ	△	×	○	×	○
50 代男性	一般動詞(結果)	アライ	○	×	○	×	○
50 代男性	一般動詞(結果)	クサイ	－	－	－	－	－
50 代男性	一般動詞(結果)	ナガイ	－	－	－	－	－

謝辞

本論文を執筆するに当たり、大変多くの方々にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

指導教員の下地理則先生には、2年次の授業から卒論の執筆指導まで、手厚く指導していただきました。まだ言語学の基礎知識さえもままならなかった私に、方言研究の面白さを教えてくださいました。卒業論文提出までに何度も添削して下さったり、挫けそうになったとき面談で何度もアドバイスくださったりと、下地先生のおかげで卒業論文という形にすることができました。

また、上山あゆみ先生、太田真理先生、久保智之先生は、言語学の基礎知識をはじめとして、多くのことをご教示くださいました。

愛媛県中予方言の方言調査を行うにあたり、調査に協力して下さった方々には、大変お世話になりました。本論文の基礎となった先行研究を執筆された久保博雅先生は、話者の紹介から、同じ故郷である愛媛県に関しての雑談、調査内容に関してのご指南に至るまで、私が調査しやすい状況を整えてくださいました。同じ研究室である宮岡大先輩には、お母様を話者として紹介して下さったとともに、文献が少ない愛媛県の方言の先行研究の紹介など、同じ愛媛県の方言の研究を行う先輩として、卒業論文執筆の土台となる部分から一緒に考えてくださいました。

研究室の先輩方、同期にも大変お世話になりました。研究室の先輩方は、卒論執筆に挫けそうなときに励ましの言葉をかけて下さったり、研究室にお菓子を置いて鼓舞して下さったり、行き詰まったときに何度も面談して私を導いて下さったりと、本当に感謝してもしきれません。同期の小林宙夢さん、是枝美羽さん、立花千夏さん、徳永理子さんとは、研究室や某ファミリーレストランでお互いを鼓舞し合いながら卒論執筆に励むことができました。同期の存在が私の精神的な支えになっていました。

最後に、本論文での話者になってくれた父、叔母をはじめとし、実家を遠く離れ心配ばかりかける私をいつもあたたかく見守ってくれた家族に、感謝申し上げます。